

<研究ノート>

「飲みニケーション」への一考察

—— 飲酒習慣，失業率，就業率を用いた分析 ——

吉 田 恵 子

要約

日本において、労働者が終業後に職場関係の者と酒を酌み交わすことはしばしば見られる光景である。本研究の目的は、国民栄養調査を用いて人々の飲酒行動と失業率や就業率に相関があるかどうかを検証することである。分析の結果、男性は女性よりも飲酒習慣を持つ者が多いことと、飲酒習慣を持つ女性の割合が増加しているが、30才、40才において増加が著しいことが明らかとなった。女性の就業率と飲酒習慣に相関関係が観察されるが、その因果関係は慎重に議論するべきであろう。

1. はじめに

「飲みニケーション」という言葉がある。これは「飲み」と「コミュニケーション」の合成語であり、酒を飲んで交流を深めることを指している。この言葉はしばしば就業後に職場の人間同士で酒を酌み交わすことを表し、日本においてビジネスツールとしてアルコールが用いられているという認識は否定できないであろう。宝酒造株式会社が2006年に行った「団塊世代と団塊ジュニアに聞く、お酒に関する意識調査」には、自宅外でお酒を飲む時にどのような相手と一緒に飲むかを問う質問項目が存在する。その回答結果から、自宅外で飲酒する際、その相手となるのは職場関係の者が多いことがわかる。

高橋（2008）は職場のコミュニケーションについて述べるなかで、「部下手当」と称して終業後の飲み会を奨励する会社の存在に触れている。日本における飲酒行動を分析した清水（1998）は、日本の飲酒文化は他国のそれとは違い、飲酒という行動が個人に属するものではなく、職場を含む社会的な行動であることを指摘する。ゆえに、日本の労働現場において飲みニケーションが果たした役割は大きいのではないかと推測できる。しかし、加藤（2009）は飲みニケーションが意思疎通の場になっている組織では、場に参加できない者に情報がいきわたらないため、市場の変化に対応することが難しくなると指摘しており、飲みニケーションが組織に与える影響は一概には言えない。

橋本（2008）は全国消費実態調査を用いて、所得階層における飲酒行動の変化について考察している。分析によれば1989年から2004年において最も裕福な階層を除いて飲酒に関する支出が減少しており、特に所得の少ない階層において減少が大きいことが結論付けられている。こうしたことから、飲酒行動は所得や労働に密接な関係があると考えられる。

本稿の目的はこうした認識がどの程度妥当であるかを分析することである。もしも飲酒行動が職場で行われることが多いのであれば、失業率が高いときには飲酒行動は抑えられ、就業率が高いときには飲酒行動は高まるであろう。飲酒行動には費用がかかるため、景気が悪化する時には所得が少なくなり、飲酒行動が抑制されるかもしれないし、その一方で失業やリストラのストレスから逃れるために飲酒行動の頻度が高まる可能性も考えられよう。本稿では、国民栄養調査を用いて、飲酒習慣を持つ者の割合が失業率や就業率から影響を受けているかについて分析を行った。

本稿の構成は以下の通りである。第二章で、使用するデータについて述べ、第三章で推定結果について説明し、第四章で考察を行う。

2. 使用するデータ：国民栄養調査

この章では使用するデータである国民栄養調査について述べる。国民栄養

調査は、第二次世界大戦後の昭和20年から、各国から食料援助を受ける際に必要な基礎データを得るために始められ、厚生労働省により形態を変えながら現在も続けられている調査である。この調査から、食物摂取量だけでなく飲酒習慣を持つ者の割合を年齢階級別に知ることが出来る。ただし、2003年以降は健康増進法の施行に伴い、この調査は国民健康・栄養調査と大きく変化し、それ以前のデータとの比較が困難になっている。ゆえに本稿では分析するにあたって1986年から2002年までの男女別、年齢層別の飲酒習慣のある者の割合を被説明変数として採用した。

図1は男女別の飲酒習慣のある者の割合の変遷を示している。この場合の飲酒習慣とは、週3回以上、1日に日本酒1合以上またはビール大瓶1本以上を飲むことを指す。この図から、飲酒習慣のある男性の割合は1994年に落ち込んだものの、ほとんどの年で50%以上の値を示している。女性は男性に比べると飲酒習慣を持つ者は少ないが、上昇傾向にあることが見て取れる。

図2は年齢層別の男性の飲酒習慣のある者の割合の変遷を示している。40代、50代がもっとも飲酒習慣を持っている割合が高く、20才代が最も低い。70才以上において上昇傾向が認められるが、他の年齢層では上昇傾向も下降傾向も見られない。図1にも見られたように、全ての年齢層において1993年から1994年において下降し、1995年に上昇している。30代は1995年に持ち直したものの、飲酒習慣を持つ者の割合は減少している。

図3は年齢層別の女性の飲酒習慣のある者の割合の変遷を示している。男性のそれとは違い、70代以上を除いたほぼ全ての年齢層において上昇傾向が観察される。30代、40代の女性において最も高い値をとっている。年齢ごとのばらつきも、1986年から2002年にかけて大きくなっているといえよう。

これらの図から、男性のほうが飲酒習慣を持つ者の割合が大きい、女性の飲酒習慣は近年になって上昇していることがわかる。特に30代、40代の女性の値において伸びが著しい。こうした変化は、女性の社会進出が背景にあるのかもしれない。女性が職を得たことにより自由に使える金額が増えたり、職場の飲み会に参加する機会が増えたりしている可能性も考えられる。

説明変数として、CPI、失業率、就業率を用いている。CPIは消費者物価指数における酒類の値を採用した。失業率、就業率は完全に対応するデータが入手できなかったため、5才刻みのデータの平均値を用いた。被説明変数と説明変数の記述統計は表1に示されている。失業率が高いときには飲酒行動は抑えられ、就業率が高いときには飲酒行動は高まるであろうから、予想される結果は失業率の係数は負、就業率のそれは正であろう。CPIは消費者が店頭での価格を見て消費量を決定しているのであればCPIの係数は負であろうと考えられる。しかし、供給する側が消費者の行動を瞬時に観察することが可能で、需要が高まったときに価格を変更しているなら、CPIの係数は正の値となるかもしれない。

3. 推定結果

表2はOLSの推定結果を表している。どのモデルにおいても男性ダミーの係数が正の値で有意な結果が得られた。就業率の係数は用いたどのモデルでも正で有意であるが、失業率の係数は年齢ダミーを加えていない場合と加えた場合では符号が異なる結果が得られている。CPIの係数は3列のみが正で有意である。

表3は男性のデータを用いたOLSの推定結果を表している。3列の年齢ダミーをくわえない推定では失業率の係数は負、就業率の係数は正の値で有意となっているが、年齢ダミーを加えた分析では就業率の係数の符号が変わっている。

表4は女性のデータを用いたOLSの推定結果を表している。CPIの係数が全てのモデルで正の値で有意な結果が得られた。失業率は1列と4列において正の値で有意であり、就業率は用いた全てのモデルにおいて正の値で有意である。

表5はパネルデータ分析の推定結果を表している。分析はランダム効果モデルで行っている。1列から3列は男性、4列から6列が女性のデータを用いた分析結果である。男性の分析結果と女性の分析結果が大きく異なってい

ることがわかる。男性の推定結果では有意な係数が存在しない。女性の分析結果ではCPI、失業率、就業率の係数が正の値で有意となっている。

推定結果を以下にまとめる。どの推定結果においても、女性の就業率の係数は正の値で有意であった。このことは社会進出によって飲酒習慣を持つ女性が増えたことを示唆すると考えられる。しかし、失業率に関しては予想に反した結果が出ており、説明が出来ない。CPIの係数は女性の推定結果において正で有意であったが、飲料メーカーが女性の行動のみを観察して価格を引き上げることは考えにくい。考えられる仮説としては、供給側の行動が需要を発掘した可能性が挙げられる。例えば、飲料メーカーが大規模なキャンペーンを打ち、それが価格に転嫁されているなら、それまで酒を飲む機会が比較的少なかった女性がキャンペーンによって刺激されたため、このような推定結果となった可能性が考えられる。

失業率の意味についても考えねばならない。失業者は「仕事がなく調査期間中に仕事をしなかった」「仕事が見つければ即座に就職できる」「調査期間中に仕事を探す活動や事業を始める準備をしていた」これら全ての条件を満たした者である。このため、景気が悪く職を失う者が増えた場合や、意識変化により非労働力であった人々が職探しを始めた場合に失業率は上昇すると考えられる。前者の場合と後者の場合では失業率の持つ意味が全く違う。失業率の係数を解釈する際に注意が必要であろう。

4. おわりに

日本において飲酒習慣を持つ者の割合が失業率や就業率から影響を受けているかについて、飲酒習慣が国民栄養調査を用いた分析を行った。分析の結果から、女性は社会進出することによって飲酒する習慣を持つ者が増えた可能性が指適できる。しかし、男性の分析結果においては頑健な結果は得られず、特にパネルデータ分析では有意な係数が得られなかった。男性の飲酒行動を説明するのは価格や雇用環境ではないことが考えられる。ただし、女性の飲酒習慣と就業率の因果関係については、より多くの説明変数を用いた分

析が必要であり、慎重に議論するべきである。

今後の課題について述べる。まず、より説明変数を増やした分析が挙げられる。飲酒運転の罰則強化など、人々の飲酒行動に影響を与えるだろう変数はいくつか考えられる。また、この分析ではマクロデータを用いたが、より詳細に個人の飲酒行動を分析するためにはマイクロデータを使うことが望ましいと考えられる。最後に、本研究では飲酒行動が世代によって変わるのか、年齢によって変わるのかを識別できなかった。これも課題としたい。

参考文献

加藤俊彦（2009）「なぜ「飲みニケーション」重視の会社は儲からないか」プレジデント10月20日配信

<http://news.finance.yahoo.co.jp/detail/20091020-00000001-president-column>

（2010年1月10日9時10分ダウンロード）

厚生労働省「国民栄養調査」「労働力調査」

清水新二（2002）『酒飲みの社会学』素朴社

総務省「消費者物価指数」

高橋敏浩（2008）「判例と「部下手当」にみる企業のコミュニケーション対策

～安全配慮義務をいかに果たすか～」2008年05月19日配信

<http://www.jri.co.jp/page.jsp?id=6971>

（2010年1月11日13時10分ダウンロード）

宝酒造株式会社（2006）「団塊世代と団塊ジュニアに聞く、お酒に関する意識調査」

橋本健二（2008）『居酒屋ほろ酔い考現学』毎日新聞社

図1：飲酒習慣を持つ男女の割合（％）

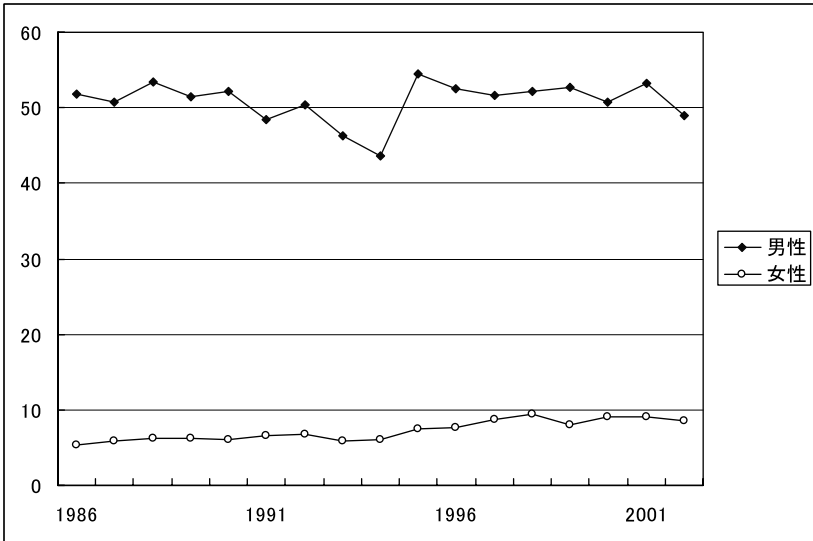


図2：年齢層別飲酒習慣を持つ男性の割合（％）

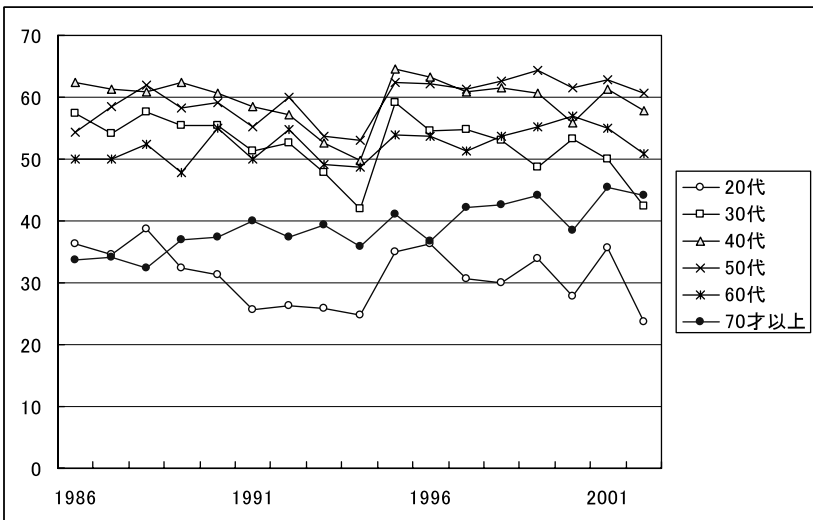


図3：年齢層別飲酒習慣を持つ女性の割合(%)

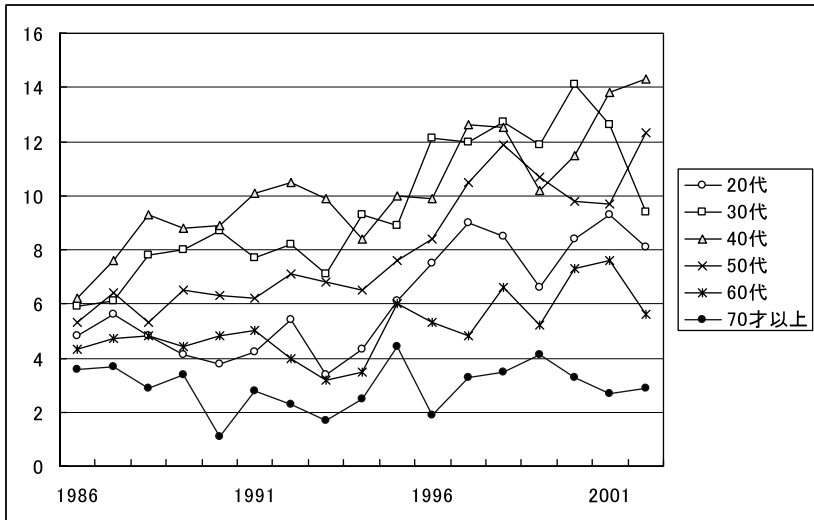


表1：記述統計

	平均	標準偏差	最小値	最大値
飲酒習慣	27.982	22.584	1.1	64.6
男性ダミー	0.5	0.501	0	1
酒類CPI	101.5	2.517	96.8	104.6
失業率	2.779	1.980	0	8.65
就業率	61.803	26.754	8.8	96.9
20代ダミー	0.167	0.374	0	1
30代ダミー	0.167	0.374	0	1
40代ダミー	0.167	0.374	0	1
50代ダミー	0.167	0.374	0	1
60代ダミー	0.167	0.374	0	1
70才以上ダミー	0.167	0.374	0	1
標本数	204			

表2：OLSの推定結果

	1	2	3	4
男性ダミー	41.979 [1.172]***	37.584 [1.172]***	37.326 [1.144]***	21.757 [1.832]***
酒類CPI	0.294 [0.240]	0.26 [0.204]	0.457 [0.206]**	-0.124 [0.128]
失業率	-0.08 [0.307]		-0.981 [0.284]***	1.568 [0.243]***
就業率		0.167 [0.022]***	0.196 [0.023]***	0.742 [0.065]***
30代ダミー				13.795 [1.140]***
40代ダミー				14.105 [1.321]***
50代ダミー				17.186 [1.207]***
60代ダミー				32.599 [2.138]***
70才以上ダミー				50.78 [4.144]***
定数項	-22.663 [24.136]	-27.464 [20.704]	-46.442 [20.895]**	-41.908 [12.709]***
決定係数	0.87	0.9	0.9	0.97

注：***は1%水準、**は5%水準、*は10%水準で有意であることを示している。
〔〕内は標準誤差である。標本数は全ての推定において204である。

表3：OLSの推定結果（男性）

	1	2	3	4
酒類CPI	0.308 [0.463]	0.136 [0.395]	0.405 [0.402]	0.371 [0.202]*
失業率	-0.834 [0.585]		-1.209 [0.513]**	-1.459 [0.696]**
就業率		0.21 [0.039]***	0.221 [0.038]***	-1.174 [0.486]**
30代ダミー				34.932 [5.936]***
40代ダミー				41.949 [5.902]***
50代ダミー				39.163 [4.740]***
60代ダミー				-2.426 [9.862]
70才以上ダミー				-62.888 [29.279]**
定数項	20.275 [46.514]	19.458 [40.201]	-4.985 [40.650]	95.117 [36.126]***
決定係数	0.02	0.23	0.27	0.89

注：***は1%水準、**は5%水準、*は10%水準で有意であることを示している。
〔〕内は標準誤差である。標本数は全ての推定において102である。

表4：OLSの推定結果（女性）

	1	2	3	4
酒類CPI	0.301 [0.110]***	0.404 [0.082]***	0.426 [0.086]***	0.12 [0.068]*
失業率	0.71 [0.143]***		-0.132 [0.150]	1.185 [0.162]***
就業率		0.103 [0.010]***	0.111 [0.013]***	0.323 [0.108]***
30代ダミー				8.755 [1.206]***
40代ダミー				6.84 [0.726]***
50代ダミー				7.749 [0.985]***
60代ダミー				14.227 [3.723]***
70才以上ダミー				21.192 [6.190]***
定数項	-25.28 [11.056]**	-39.008 [8.344]***	-41.34 [8.766]***	-33.672 [6.531]***
	102	102	102	102
決定係数	0.29	0.58	0.58	0.86

注：***は1%水準、**は5%水準、*は10%水準で有意であることを示している。

[]内は標準誤差である。標本数は全ての推定において102である。

表5：パネルデータ分析の推定結果

	1	2	3	4	5	6
酒類CPI	0.132 [0.178]	0.126 [0.159]	0.13 [0.183]	0.233 [0.060]***	0.403 [0.062]***	0.237 [0.061]***
失業率	-0.045 [0.372]		-0.027 [0.430]	1.072 [0.161]***		0.953 [0.162]***
就業率		0.046 [0.148]	0.016 [0.183]		0.107 [0.032]***	0.064 [0.033]*
定数項	35.638 [18.352]*	32.776 [20.668]	34.713 [21.331]	-19.321 [5.978]***	-39.099 [6.330]***	-22.542 [6.143]***

注：***は1%水準、**は5%水準、*は10%水準で有意であることを示している。

[]内は標準誤差である。標本数は全ての推定において102である。

1、2、3は男性の4、5、6は女性の推定結果を表している。